【千羽鶴の奉納について】

私は原爆の子の像と千羽鶴奉納についての説明をします。

原爆の子の像は、年間を通してたくさんの千羽鶴が捧げられていることから、別称「千羽鶴の塔」とも呼ばれているのだそうです。像の頂上には大きな折り鶴を捧げ持つ少女のブロンズ像が立っていました。この少女は原爆の被爆者である佐々木禎子さんという方がモデルになっているそうです。像の真下には平和への願いが刻まれている石碑があり、内部には鐘がありました。そもそも、なぜ、原爆の子の像は造られたのでしょうか。それは白血病で亡くなった禎子さんの同級生たちの力によって造られたのです。禎子さんの死をきっかけに「原爆の子の像」の建立運動は全国的に広がりを見せ、ついに約３年後に像が完成しました。原爆の子の像のすぐ後ろには日本国内をはじめ、世界各国から、いくつもの千羽鶴が捧げられていました。その数はなんと、年間１４万羽、重さにして約１０トンにものぼるのだそうです。どの千羽鶴も、平和への願いが込められていました。私も実際に自分達で作った千羽鶴を奉納しました。これはとても貴重な体験になりました。私は、この経験を通して、千羽鶴を思いを込めて捧げにくる人が大勢いたことから、誰もが全員、世界平和の実現を願っているんだということを強く思いました。

【千羽鶴の奉納した感想】

私は、千羽鶴を奉納した時の気持ちを発表します。

私は、「核のない世界の実現」、「世界中が平和になり、子供たちが教育を受けられますように」という願いを込め、千羽鶴を奉納しました。千羽鶴を奉納した時、原爆の子の像に捧げられている千羽鶴の多さに驚いたことを今も覚えています。その中には、アメリカのオバマ大統領の似顔絵と、ＰＥＡＣＥという文字を、鶴で描いたものもありました。私は、たくさんの奉納された千羽鶴を見て、「世界の平和を日本の人が、世界中の人が望んでいるのだな。」、「千羽鶴の数だけ計りしれない原爆の悲しみがあるのだな。」と感じました。

同時に、私自身の幸せを感じることができました。現在私達が教育を受けられるのは、日本が戦争を放棄して、教育を受ける権利を憲法で守ってくれているからなのだと感じました。

私たちにできること。それは佐々木禎子さんのように、戦争の犠牲となり学校へ通えなくなってしまった人達の分まで感謝の気持ちを忘れず、学校生活を一生懸命送り、楽しむこと。また、佐々木禎子さんのように、どんな困難を前にしても前向きに生き続けていくことだと考えます。そして平和を繋いでいくことだと千羽鶴の奉納を通して思いました。

【被爆講和学習について】

私は、被爆講話学習の時の講師の方と講話の内容を紹介します。

講師の方は原爆孤児の語り部、川本省三さん（８２）です。川本さんは、原爆に両親ときょうだいの計６人を奪われました。「諦めてはいけません。」この言葉は、戦後を生き抜いてきた川本さんの心の支えである母が生前、よく口にしていた言葉でした。

川本さんは、８月６日の夕方、「広島が全滅した」と知りました。３日後、姉が迎えにきました。でも、その姉も白血病で亡くなってしまいます。親戚にも見放され、行き場のなくなった川本さんは醤油会社で働くようになりました。その社長に家を建ててもらったものの、好きだった女性の家へ結婚を申し込みに行くと「娘はやれん。」と女性の父親に言われ、何も持たずに村を出まし

た。それからは食品業界でがむしゃらに働きました。６５歳で広島へ帰り、たくさんの人に「諦めてはいけない」というメッセージを今でも伝え続けています。私もこの貴重な体験で学んだことを忘れずに、何事も諦めない強い気持ちを大切にしていきたいです。

【被爆講和学習を聞いた感想】

私は、被爆体験講話を聞かせていただいた感想を報告させていただきます。

当時の広島市では、小学生と中学生で１万４千人ほどで一般の人は３０万人いましたが爆心地の周辺にいたほとんどの人が皮膚がとけ服につき、性別が分からない状態で苦しみながら亡くなってしまったそうです。このお話を聞いて原子爆弾が起こす熱線や放射線や爆風の恐ろしさを感じました。

また、戦争が終わって疎開先から帰ってきた子供や、生き残った子たちは、家や家族がなく、戦争が終わってからすぐは、貧しい生活をしていたそうです。そして、子供たちが大人になっても、学校へ行っていなく、学歴もないので就職することができず、生きるために、命がけでその日、その日を生きていたそうです。川本さんのお話を聞いて、資料館では学べないことを学ぶことができました。ここで学んだことを生かして、今自分にできることを考え、後世に伝えていきたいです。

私は原爆被爆者講話を聞いての感想について発表します。川本さんは実際に体験したことを丁寧に説明して下さいました。その中でも特に心に残ったことは、終戦後の広島についてです。私たちは被爆する恐ろしさを中心に学習しましたが、本当に大変だったのは終戦後の復興の時だったと思いました。川本さんによると終戦以前は全国から多くの救援がありましたが、８月１５日を境にしてがくんと少なくなってしまったそうです。そのため、街では路上生活をしていた子供たちが次々と死んでいったそうです。さらに原爆による風評被害で広島の人々は結婚もできず、仕事につくことも難しくなり、悪い方向へ流れていってしまった子供もいたそうです。川本さん自身も、とてもつらい人生を送っていったそうです。このように原爆はただ人の命を奪う兵器ではなく、その人の人生の道をも奪う、非人道的な兵器です。私はこのようなことを二度と繰り返さないためにも、核兵器の廃絶は大切だと思いました。

【被爆講和学習を通して学んだこと】

僕は、「講話を通して学んだこと」を発表します。

川本さんは当時のことを細かく、分かりやすく話して下さいました。

原爆で被害を受けたのは、建物だけではなく、多くの人の心も傷つけられてしまったということを感じました。また、学歴がなく就職できなかったり、差別をされてしまうこともあったそうです。

講話の中で「学校に通えることは当たり前ではない」という言葉が印象的でした。今、僕達は当たり前のように学校に通えていますが、それは当たり前ではない人がいるということを改めて知りました。講話を聞いて、学校に通えること、家族と一緒にいられることなど、多くの日常のことへの感謝の気持ちを忘れずこれからの人生を歩んでいこうと思いました。原爆の体験を話すことは、とても辛いことだと思いますが、一生懸命に話して下さったので、多くの人に伝えてい

きたいと思います。

以上